



渋沢史料館

渋沢翁の生涯と業績を広く紹介する博物館として、昭和57(1982)年に開館。かつて渋沢翁が住んでいた旧渋沢邸跡地に建ち、さまざまな資料を本館で展示するとともに、旧渋沢庭園に残る大正期の建物「晩香廬」「青淵文庫」の内部公開も行う。

※本対談ページで画像を掲載している晩香廬、青淵文庫、渋沢栄一選歴記念立像はすべて同館所蔵

所在地:東京都北区飛鳥山公園内

育てていただいた地域を 元気にしたい

井上 時代の変化とともに、企業は進化・変化するものだと思います。一例を挙げると、渋沢栄一が創立、育成に尽力した紡績会社では、繊維産業を取り巻く事業環境が激変するなか、創業精神に立ち返り、紡績業で培った技術を生かしつつ事業ポートフォリオを大きく転換されました。その会社の方々は「換骨奪胎^{かんこつだつたい}」とおっしゃっています。転換期にこそ、創業精神に立ち返ると、「変えるもの」「変えるべきではないもの」、ここを起点にどのように進化・発展させていくべきなのかが見えてくるのではないのでしょうか。

加藤 鉄道は、私が入社した昭和50年頃にモータリゼーションの進展で斜陽になると言われた時代もありましたが、今では高齢者にやさしく環境にもやさしい移動手段として、社会の評価や期待が高まってきています。私は「鉄道復権」と言っているのですが、反面、人口減少社会においては、鉄道の経営環境は厳しさが増すばかりです。鉄道事業は社会インフラとしての機能をしっかりと守りながら自立し、存続していかなければなりません。他の事業の自立も然りです。自立し、社会に貢献する事業の集合体として、グループ全体として利益を上げていく。これが十数年前から取り組んできた経営改革の根底にある考え方で、その集大成が今回の持株会社体制移行です。

先ほど「合本主義」のお話がありましたが、グループ資産を有効に活用し、社会に貢献する商品やサービスを創造していくことも、持株会社体制移行の大きな理由のひとつです。機を見て必要な資金や人材を投入し、少々の困難があっても果敢にチャレンジしていきたいと考えています。

当社グループの中期経営計画「創生果敢」では、先ほ

どの「BIOSTYLE」など「くらしの価値」を高める“コンテンツ創造”に加え、大阪・京都を中心とする“観光創造”、京阪沿線を新しくデザインする“沿線再耕”の3つを主軸戦略に据えています。今、「地方創生」が盛んに言われていますが、渋沢翁は当時から地域を大事になさいとおっしゃっていました。私たちにとって地域といえば、沿線です。そこがもう一度元気になるような取り組みに注力していきたい。そのためには、沿線外にも打って出ます。例えば不動産では、沿線で培ったノウハウを生かし、東京や札幌でも事業を展開しています。そこで得た利益の一部は地域に還元して、沿線を元気にしたい。それが京阪グループの目指すべき姿ではないかと思っています。

井上 そうですね。渋沢栄一も大正期に入ると東京の田園調布の開発など生活圏をトータルで見渡した事業に力を入れていました。鉄道会社を中心とした企業グループとしての使命を十分に果たしながら、新たな分野にもチャレンジされようとしている取り組みは、まさに渋沢の精神を受け継ぐものだと感銘を受けます。これからのますますの発展を期待しています。

加藤 次の世代に必要とされ社会に貢献する商品やサービスを創造し、私たち京阪グループも成長していきたいと思っています。「第2の創業」を掲げる今、あらためて渋沢翁の創業精神に立ち返り、次の100年に向かって果敢にチャレンジしていきます。本日はありがとうございました。

